

# 顧客のニーズに応えた画期的な製品づくり 長崎から世界に挑戦する「KIKKONET」



達人たちの挑戦 ― ②1

さまざまな可能性が広がる

## 亀甲網

製網機に向かってまっすぐに伸びる直径三ミリの糸状の樹脂。樹脂が送り込まれるたびに回転する製網機のボビンの音が、打ち寄せる波のように工場内に響く。そして、規則正しく編み込まれていく亀甲網。

樹脂を原料としたこの画期的な網を製造しているのが粕谷製網（株）である。漁網の製造会社としてスタートし、定置網や養殖用いけす網を事業の柱としていた同社が亀甲網を開発するきっかけとなったのは、昭和五十六年、得意先からの「もっと長持ちする網が欲しい」という声だった。「当時は金網の時代。腐食のため二、三年で更新するのが当たり前でした」と粕谷勝社長は当時を振り返る。

金網に替わる素材を探し始めた粕谷社長は、「ポリエステルモノフィラメント」という樹脂に出会う。さびないので耐久性があり、引つ張り強度は金網に匹敵する。しかも重さはその六分の一という優れたものだった。さっそく、メーカーなどの協力を得て専用の製網機を開発し、亀甲

網の製造に着手。当初は思うように売れなかったが、導入した養殖業者が十年間更新せずに使い続けていることが口コミで広まると、徐々に売上が伸び始めた。

ところが、長持ちするゆえに、一度導入するとほとんど更新されない。困った粕谷社長が市場開拓に乗り出した矢先、ある土木資材会社から「崖の落石防止網として、さびない網が欲しい」という依頼が舞い込む。強度試験を経て転用できることがわかると、陸上用としても全国各地で採用されるようになった。「耐久性があつて軽い」という特性から、その用途が広がったのだ。加えて、養殖業が盛んなオーストラリア、ノルウェー、イタリアや、山岳地帯で人力での土木工事が多いネパールなど海外からの注文も相次いでいる。

「用途を開発することが新しい市場開拓につながる。まだまだこれからですよ」と意気込む粕谷社長。ピンチをチャンスに変え、今や「KIKKONET」として世界で活躍している亀甲網。その発展の可能性は、まさに網の目のように限りなく広がっている。



いくつもの樹脂が製網機へと引き込まれていく



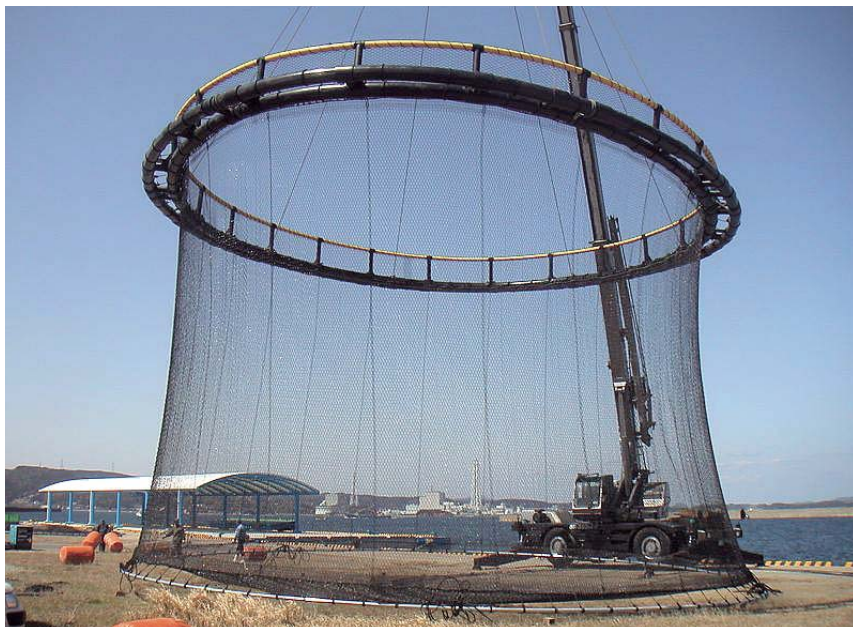
粕谷勝社長

### 粕谷製網株式会社

昭和23年、漁網を製造する粕谷然糸製造所として諫早市で創業。昭和41年、粕谷製網株式会社に改組。昭和50年頃から亀甲網の製造販売を開始。

現在は養殖用だけではなく、落石防止網、小動物の侵入防止フェンスなど、さまざまな用途に広がりをみせる。近年、アメリカ、ノルウェー、イタリア、ネパールなど、各国の企業との業務提携などによりその販路は世界へと広がっている。

【本社・工場】  
諫早市川内町485 TEL.0957-22-0373



海上で培われた技術が陸へと広がりはじめている  
(写真上・養殖いけす 左下・防護フェンス 右下・落石防止網)

